

existences

2014

Yuta Uozumi
<http://sonir.jp>

本作品では、3つの装置が鑑賞者を囲むように配置されている。

この装置は生命のメタファーとして制作され、それぞれがサーマルプリンタとソレノイドを用いた振動子という単純な部品から構成されている。この装置が行うのは、規定行の印刷とソレノイドの振動といった動作のみである。

この3つの単純な装置は、コンピュータ内に構成された独自のシミュレーションモデルと直結されており、単細胞生物をイメージしたシンプルな捕食・被捕食の関係で結ばれ、互いに反応を行う。各装置には、それぞれ個性として、反応の敏感さや速度、強靭さなどが個別に設定され、異なった性格を持っている。

その時々状況によって、ある装置とある装置は密接に関わり、呼応を繰り返す。また時には、三者が共存可能な均衡状態に至り、反応を長い時間停止する。

これらのインタラクションは時間軸上に点を穿ち、粗密のあるリズム構造を形成する。各装置はそれを振動子による音響や、熱転写用紙に視覚的なパターンとして定着する。

作品には電子音によるサウンドスケープが付与されている。これらは、各装置間のインタラクションや状況などに応じ、時折空間を満たすように設計されている。ここでは、その瞬間瞬間の装置の反応に応じた断片的なノイズに加え、より長い時間軸で、時間毎、一日毎といった尺度で音による大きな変化が訪れる。それは、装置間の反応速度やプリンタによる印字のパターンの変化などを伴い、カタストロフィをもたらす。

作品内の「系」で起こる変化の時間尺度は、秒単位～時間や日といった大きな幅となり、鑑賞者がすべてを体験し、把握することは難しい。また、装置を駆動させている3つの存在も目には見ることはできない。しかし、紙に残る痕跡、そして時折訪れる音の景色から鑑賞者が感じ、垣間見ることは可能である。

魚住 勇太 Feb 13. 2014